



→ Where are you from?
どこから来ましたか。

→ What's your impression?
神保町の印象は？

→ How did you know this place?
どのように神保町を知りましたか。

etc...



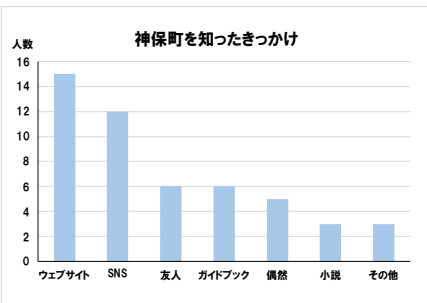
コロナ禍も明け、インバウンド客が絶えない日本。
神保町でも多くの外国人観光客を目にする。
彼らはなぜ数ある都市の中から、神保町を選んだのか。
そして何を求めて訪れたのか。
舞台は数多くの古書店が建ち並ぶ「神田すずらん通り」
古書店街を歩く外国人観光客に突撃インタビュー！
どこから、誰と、どんな目的で訪れたのか。
実態を調査！

YOUは何し
に神保町へ？

Why did you come to Jimbocho?



神保町を訪れた外国人の実態調査！



ターゲットは「神保町を歩く」外国人観光客40組。突撃インタビューを通じて、気になる「なぜ」を徹底解析！

意外にも身近にあったきっかけ

早速尋ねた質問は「神保町を知ったきっかけ」。WEB上の媒体が上位に。また、若い女性を中心にTicTokやYouTube、インスタグラムなどSNSの利用率も高い。どんな内容を参考に訪れたのだろうか。

★ COMMENT

「英語圏の人が投稿した神保町紹介をYouTubeで見た」
スペイン・女性

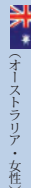
「アメリカでは大勢が使っているアプリRedditで知った」
アメリカ・女性

「古本に詳しい友達に、本で有名な街だと紹介された」
フランス・男性

「Japanese Art」と検索したら神保町がヒットした」
イスラエル・男性

「『Lonely Planet』を読んで気になってみた」(ポルトガル・男女)

「東京ドームに行くついでに寄った」(ドイツ・男性)

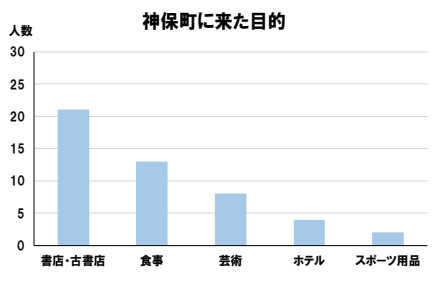


「メルボルンの日刊紙『The Age』の神保町特集を読んで来た」(オーストラリア・女性)



「Lonely Planet」

100 国以上の国と地域で高いシェア率を誇るガイドブック。アメリカ、カナダ、フィンランド等幅広い国で愛用されていた。フランスでは『Le Routard』が人気。



「偶然通った」だけの外国人も少なくなかった。秋葉原、皇居、東京ドームなど、近隣の目的地に行くついでに寄った人も多い。しかしながら「ついで」の外国人の多くが、街の喫茶店や本屋を楽しんでおり、瞬時に観光客を魅了する神保町のポテンシャルの高さがうかがえた。

一方で「外国人から外国人へ」神保町の魅力を伝える現象が多く見られた。SNSでは一人から不特定多数へ。友達との会話では個から個へ。

「外国人の本好き」の中でも、神保町は日本の有名な「本の街」として広く認識されていた。

★ COMMENT

「漫画は日本語の勉強に繋がる。『ドラゴンボール』と『呪術廻戦』の大ファン」(ドイツ・男性)

「原書房に行くために神保町に来た。日本のアートを詳しく勉強したい」(イスラエル・男性)

「アジアの歴史に興味がある。歴史に関する古書を探して来た」(イギリス・男性)

「現在大学で建築学を学んでいる。南洋堂で建築の専門書が欲しい」(ドイツ・女性)

「現地で雑誌編集者をしている。日本のヴァンテージ雑誌を求めている」(フランス・女性)

「美大で木版画を学んでいる。文房堂で画材を沢山購入した」(スペイン・女性)

「年間探し回った『令和次郎探集講義』を見つけたことができた」(フランス・男性)

外国人が求める「神保町らしさ」

What did you buy?

～外国人の購入品紹介～



オーストラリア・女性



①複数のポストカードは駅へのプレゼントとして購入



デンマーク・女性



①原書房の浮世絵友人に勧められ浮世絵のために神保町へ。



スペイン・女性



「新版世界の」と「手作りシルクスクリーン」専門学と趣味に合わせて購入した。



ドイツ・女性



①『メタボリズムの未来都市 (英語版)』『日本の家』『メイドイントーキョー』は専門の建築学に話かす



アメリカ・夫婦



①『図説・死体論』『金子國義アリスの画廊』彼らは金子國義の大ファン



フランス・男性



①①『トウキョウ・メタボライジング』②『令和次郎 探集講義』③『メタボリズムの未来都市 (英語版)』④は10年かけて探した書籍。⑤はドイツ人女性も購入した



「@ ワンダー」横の書棚の前で古書を楽しむイタリア人男性



新規も古参も街の雰囲気の中に

最後の質問は神保町の印象について。多数の外国人が口を揃えて「cool（居心地がいい）」「nice（静か）」と答えた。アメリカ人の男性は「渋谷は正直うるさいね」と笑った。フランス人の女性も「秋葉原や渋谷が外国人に街だと思うけど、私は神保町の落ち着いた雰囲気がとても好き」と大絶賛。

また、チェコ人の男性は、「神保町は東京の中でも観光客が少ないイメージ」だと言った。本好きには堪らない観光地の一方で、穴場スポット的な存在としても知られている。

多くの日本人は、外国人に人気な街として、渋谷や新宿を想像する。しかし一方で、東京という都市にありながらも、穏やかで、静かな風情を求める外国人は多い。

「活字離れ」が進む現代でも、神保町の強みである「本」を愛する外国人は多かった。

どれほど技術が進化しても、神保町の「らしさ」を守りたい。神保町の歴史と伝統こそが、外国人を惹きつける魅力なのだ。

What is your favorite bookstore? ~外国人からよく名前が挙がる書店~

《東京堂書店》

古書店が軒を連ねるすずらん通りで、一段と目を引く大型の新刊書店。2012年にカフェを併設した。インタビュー中も多数の外国人が店内へ吸い込まれていく様子が見られた。多数書籍を展示している。



《magnif》

「magazine」から派生した造語。雑誌の古本屋。ファッション誌や写真集など目で見え楽しめる。店舗の黄色い外観も魅力的。インタビュー中には、店内にいるお客さんが全員外国人だった瞬間もあるほど。



Impressive word ~印象的なフランス人男性の発言~

'Best place to find very specific and old books.'

神保町は特定の古書を見つけるためのベストな場所だ。

神保町の街並みは穏やかで静か。近隣の繁華街とは一味違う魅力だ。バラエティに富んだ老舗の専門的な古書店が連なる「すずらん通り」。決して広くはない神保町の魅力は、多数の外国人の心を掴んでいた。



奥さんと飲食店を求めて訪れた男性

本で繋がる日本と海外

私が神保町を訪れたきっかけ



取材した中でドイツ人のファンが圧倒的に多かった。中には、村上春樹の大ファンも。

“日本の書籍を読んで日本に来た外国人”

該当インタビューをする中で私たちは、日本の書籍を読んで神保町を訪れた人たちに会った。そこには小説・雑誌と幅広いジャンルが存在した。彼らはさらに新たな日本の書籍を求めて古書店街を巡る。まさに本が“日本と世界を繋ぐ架け橋”となっていた。皆さんも気になる書籍があったらぜひ読んで欲しい。

①『森崎書店の日々』(小学館)

本の街・神保町を舞台に、一人の女の子の成長を描いた小説。第三回ちよだ文学賞大賞を受賞した。2010年に映画化され、2011年には、本作から2年後を舞台とした続編『続・森崎書店の日々』が出版された。

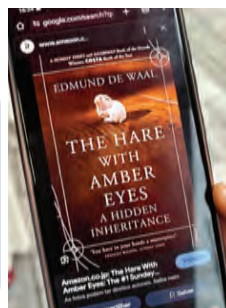
現在、世界30言語を超え翻訳されている同小説だが、2024年にはイギリスの「プリティッシュ・ブックアワード」にノミネートされ、注目を深めた。

現在は重版されていないため、ぜひ神保町の古書店で探してみよう。

②『琥珀の眼の兎』(Vintage)

イギリスの陶芸家による家族回想録。彼は東京の大祖父の部屋で出会った美しい根付に魅了され相続する。日本から輸出された根付の壮大な旅路を追いながら、主人公一族の歴史を知る。全英を絶賛の渦に巻き込んだノンフィクション。『エコノミスト』『サンデー・タイムズ』両紙及びコスタ賞のブック・オブ・ザ・イヤー、王立文学協会オナーチエ賞に輝いたベストセラー。

原タイトル「THE HARE WITH AMBER EYES」。日本語にも翻訳されている。



「THE HARE WITH AMBER EYES」(琥珀の眼の兎)

ポルトガル人の女性が愛読している本書。彼女は他にも「コンビニ人間」(文藝春秋)など多数の日本の小説を楽しんでいた。今後も開拓し続けるそうだ。

③『オトモマガジン』(Rockyrama)

『オトモマガジン』とは、フランス人編集チームによって創刊された日本の雑誌。映画ディレクターである、ヨハン・キアラモンテのディレクションのもと、『Rockyrama』誌(サブカルチャー雑誌)のフランス人チームによって制作された。



『OTOMO 6』

現地で雑誌編集に関わっている女性に出会った。彼女は「神保町に存在する雑誌の古本をたくさん見つけた」と意気込む。

残念ながら、現在はフランス語版のみの発売。表紙には漢字など多数の日本語を使用している。まさに、日本とフランスを繋ぐ雑誌だ。

ヴァンテージの紙で編集された雑誌の凸凹やカラフルさは、まるで昔の雑誌のようだ。テーマはマンガ・音楽・映画(怪獣ヤクザ)ゲームと幅広く、日本のポップカルチャーファンにはたまらない。